

脱炭素化のきっかけに

企業のマーケティングプロモーション等を手掛ける東京ガスコミュニケーションズ(柴田陽一代表取締役社長)は、脱炭素化のきっかけづくりにも役立つ国産木材を使った家具「カーボンストックファニチャー(CSF)」を昨年より受注販売している。「都市を森林の貯蔵庫に還す」をコンセプトにした商品で、環境意識の高いデベロッパーや官庁、自治体等への納入例を増やしている。

CSFは、都市から排気物のように工場や製造で出される二酸化炭素(CO₂)を吸収した森林の木材をオフィスや公共空間の家具として利用することで、都市内に多くの炭素(カーボン)を貯蔵し、大気中のCO₂の削減にも貢献する。

CSFは無垢材の素材感を生かしたソファやベンチ、カウンターなどをラインアップする。木材は建材として一般流通する105mm角の角材を利用する。輸送に伴うCO₂排出量を抑えるため、森林認証など産地を特定できる木材を納入先に近い地域の森林組合から買い取る。一般的な家

字が持つ意味をさらに深

地域木材活用のCSF



申崎裕介部長

く学ぶワークショップもオプショナルで用意する。CSFの発案者の一人、同社プロモーション統括部の申崎裕介部長は「CSFを通じて、都市

と森の循環構造を作り社会課題の解決につなげた。循環により森を適切に管理できれば、山の保水力が上がり近年多発している自然災害を抑制できる。また国産材の利用を増やせば、森林が若返り、CO₂の吸収量を増やすことができ、地球温暖化の抑制にもつながる」と語る。



藤野中学校ではCSFを図書室に設置。「子どもたちに自由に使って欲しい」と守屋孝子校長。

が国産木材の利活用等を促進する東京都の施設を総合プロデュースしたことに端を発する。ここで森の荒廃や、担い手不足など国内林業の現状に触れ、この課題の解決に資する事業を検討。昨年、設計デザイン会社・HASTUDIOと共に今年度販売するCSFのCO₂固定量は10tを着用を目指す全国のガス会社にも是非活用してもらいたい」と話す。

五輪レガシーを活用

相模原の中学校にCSF設置

相模原市は1月24日、公立藤野中学校に同校近隣の佐野川地区から切り出された木材を利用したCSFを設置した。このCSFには、CO₂固定量とともに、昨年の東京2020オリンピック・パラリンピック(東京五輪)のエンブレムも刻印されている。東京五輪では、全国の自治体から提供された木材で選手村を作り、閉会後に「五輪レガシー」として自治体へ返却。相模原市は約半分をCSFで利用することを決め、市内20カ所以上



田倉五己課長

の公共施設に設置した。同市環境経済局経済部の田倉五己森林政策課長は「相模原市は市域の6割が森林で、神奈川県は「座ったりの寝転んだり、水がめとしての責務がある。これまでも森林環境の維持保全に関する取り組みを行ってきたが、CSFのコンセプトが当市の取り組みと合致した」と語った。

と、特にCO₂固定量の刻印は「視覚的に訴えるデザインで環境を考える入り口として良いアイデア」と評する。また藤野中へのCSF設置については、生徒たちが住む佐野川地区を含む藤野地域で育まれた木材が選手村で使われていたこと、地元で先人たちが残してきた貴重な森林資源があることを知り、誇りに思うことにつながればと期待を込める。藤野中の守屋孝子校長は「座ったりの寝転んだり、水がめとしての責務がある。これまでも森林環境の維持保全に関する取り組みを行ってきたが、CSFのコンセプトが当市の取り組みと合致した」と語った。